



照明の思いやり

照明家として、そして照明テクニシャンとして、公演を観に来てくださったお客様に、最高の舞台を見せたいという気持ちは、どなたも持っていると思います。照明の道に進み出してから、公演以外にも、身の回りの照明を、気にするようになった方も多いのではないのでしょうか。

私が照明に足を踏み入れて間もなくしてから、ある日本人照明家(兼チーフ)のMさんと一緒に和太鼓グループのヨーロッパツアーと一緒に回らせていただいたことがあります。そのツアーでは、常に出演者や演出家、音響さんたちと同じ宿泊場所でしたし、ほぼ毎日、行動を共にしていました。そんな環境の中、Mさんに、はっとさせられたことが何度もありました。宿泊先の階段が暗いとき、話し合いのお部屋の照明の色味(これはイギリス人照明家も気にする人がいます)、集合写真を撮るときに環境の明るさ、打ち上げ後の飲み場で照明が明るすぎるとき、反省会で公演ビデオを出演者と見るときに部屋が明るすぎるときなど、その方が共同生活、集

団行動の中で、常に照明で人に気遣っているのに関心させられました。舞台を光で演出するだけでなく、お客さんへの心遣いはもちろん、出演者と一緒に仕事をする人への真心というものさえ、ひしひしと伝わってきました。この方にとって、周りの人のために照明を調整してあげることはとても自然なことのように思いました。

Mさんの作り出す、和太鼓公演ツアーの照明は、シンプル、かつ切れがあり、和太鼓のリズム、重さ、強さをとことん理解したうえで、繊細に仕上げられていました。理屈は一切言わず、ただ照明の表現力で、和太鼓の力強さ、美しさ、神秘さ、面白さ、その他もろもろを引き出していました。

主張しすぎない照明だけど、主張できるだけの大きな器、勇気と余裕をもち合わせた、理解と説得力のある照明でした。きっと、演出家と出演者のことをよく理解し、互いに信頼関係ができていたからできるスタンスなのだなと思いました。

公演中でも、常にお客さんと出演者のことを思って、お仕事をされているように思いました。暗転の長さで、観客と出演者のモチベーションが変わること。光量を上げるスピードとカーブを毎回変えて、出演者の背中を押すこと、息を合わせること。客入れ、客出しの明かりの色味とフェードの時間で、お客さんを温かく迎え入れ、送り出すこと。最後のカーテンコールで観客が総立ちをしているとき、ふわっと客電をつけてあげて、出演者にお客さんの喜ぶ顔を見せてあげる優しさ。当たり前のことなのかもしれませんが、コンサートだからできることなのかもしれませんが、出演者とお客さんを一体にするとはこういうことなんだと、その照明家に会って初めて気づきました。そして、その方にお会いして、照明でできることは、舞台上だけではないのだなと気づきました。光を使った、ある愛の形のようにも思いました。

しかし、そんな愛も虚しく、グループ内でいろいろあり、結局、その和太鼓グループを辞めて、照明業も辞めてしまったと数年後に聞いて、とても残念な気持ちになりました。あんなに才能がある方が照明を辞めるなんて…。でも、きっと彼は今でも、身の回りの人たちを、優しい照明で包んであげているような気がします。

照明のお仕事に関わっているみなさんは、仕事をしていないとき、光に対して、どのような反応をして、どのような行動をとっていますか?とても興味深いです。

